

# 日本語文における連用修飾語成分に見られるパラレルについての一考察：「赤く変わる」と「赤に変わる」は同じか

著者	王 棟
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	3
ページ	27-33
発行年	2018
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00001635">http://doi.org/10.15084/00001635</a>

# 日本語文における連用修飾語成分に見られるパラレルについての考察

## —「赤く変わる」と「赤に変わる」は同じか—

王棟(東京外国語大学大学院生)

### 要旨

本発表はこれまで注目されてこなかった日本語の連用修飾語に見られるパラレル「形容詞ク動詞」(以下 A ク V)と「名詞ニ動詞」(以下 N ニ V)の棲み分けに注目した論考である。本稿は大規模コーパス、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)の用例に基づいて、「赤ク/赤ニ動詞」を「A ク/N ニ V」の例として考察した。その結果、「A ク V」と「N ニ V」の棲み分けについて以下のことを指摘する。

- ① 通常、動詞の補語と修飾語の位置に現れるのは形容詞「赤ク」であり、「赤ニ」の使用は稀である
- ② 「赤ニ」は色によって表される意味概念の対立のある文脈に現れやすい。
- ③ 「色の多様性に言及する場合」と「色変化の始まりがある場合」と「色が詳細な説明を受ける場合」において、「赤ニ」の使用は文法的な面において義務的と言ってよいが、事象を説明する機能的な面において「赤ニ」の補足を行っている。

## 1. はじめに

動詞述語文において、動詞にかかって事象の情態を表す連用修飾語がある。その多くは副詞と形容詞・形容動詞の連用形である。例えば、以下のような例が挙げられる。

- (1) 牛肉を きれいに 切る。
- (2) マイクを しっかりと 握る。
- (3) 体が 小さく 見える。

このような連用修飾語成分には、「形容詞ク動詞」と「名詞ニ動詞」とのパラレルを成す特殊な例が存在している。日本語にはこのような「形容詞・名詞」の対を成す語彙がそれほど多くはないが、そのほとんどは色彩を表す語である。例えば

- (4) 壁を 赤く/赤に 染める。
- (5) 星が 赤く/赤に 光る。
- (6) 光が 赤く/赤に 見える。

日本語の連用修飾語成分に見られる「形容詞ク動詞」と「名詞ニ動詞」とのようなパラレルはどのような棲み分けがあるのだろうか。本発表は日本語の連用修飾語成分にみられる「形容詞ク動詞」と「名詞ニ動詞」のパラレルに注目して、現代日本語書き言葉均衡コーパスのデータに見られる「赤ク動詞」(以下「赤ク V」)と「赤ニ動詞」(以下「赤ニ V」)の棲み分けを観察し、「赤ニ V」の使用条件を明らかにすることを目的とする。

## 2. 「文成分」と「共起動詞の種類」から見た「赤ク」と「赤ニ」

### 2.1 「文成分」から見た「赤ク」と「赤ニ」

日本語の学校文法では、文の成分として、主語・述語・連体修飾語・連用修飾語・独立語の五つが挙げられる。そのうち、「連用修飾語」の分析と再構築は国立国語研究所(1963)・鈴木(1972)・早津(2010)などが成されてきた。本稿は早津(2010)の分類と定義を援用する。

早津(2010)は連用修飾語を構文的な機能の異なる成分、「補語」・「修飾語」・「状況語」・「陳述語」・「接続語」の五つに分けている。「赤ニ V」・「赤ク V」において、「赤ニ」と「赤ク」

は「補語」と「修飾語」として働く場合がある。

早津(2010)では「補語」を「述語動詞の表す動きの成立に直接的・間接的に参加している事物であって述語動詞の意味によって一定の補語が要求されるのであり、補語と述語は切り離しがたい関係で対立しつつ補語が述語を補っている」と定義している。「赤クV」と「赤ニV」の例としては「赤クスル／ナル」と「赤ニスル／ナル」がそれに当たる。以下の例のように、補語としての「赤ク」・「赤ニ」と述語とは切り離しがたい関係にある。

- (7) 髪を赤く／赤にする。  
\*髪をする。
- (8) 果皮が赤く／赤になる。  
\*果皮がなる。

それに対して、「修飾語」は、「述語の表す動きや状態について、その様子・程度・量などを詳しく説明して述語をかざる成分」を指す。「赤ニ」・「赤ク」が「修飾語」となる場合、専ら述語動詞の表す動きや状態についてその様子を詳しく説明している。例としては「壁を赤く／赤に染める」などがある。

本節で述べたように、文成分に注目すれば、動詞にかかる「赤ク」と「赤ニ」は「補語」として働く場合があれば、「修飾語」として働く場合があるということがわかる。

## 2.2 本発表が目指す「共起動詞の種類」

前節で述べた通り、「補語」は「述語動詞の表す動き」に関わり、そして「修飾語」が詳しく説明しているのは「述語の表す動きや状態」に関わるという点に注目すると、述語となる動詞の性格を考慮に入れる必要があると考えられる。

日本語の動詞は「<動作>か<変化>か」と「<主体>か<客体>か」という観点を組み合わせると、次のように三分類することができる(奥田 1977)。

・主体動作・客体変化動詞：主体の動作を表すと同時に、客体の変化を捉えている動詞である。テイル形を取る場合、能動は動作継続を表し、受動は結果継続を表す。すべては他動詞である。

例：染める、塗る、腫らす

・主体動作動詞：動作のみを捉えている動詞、自動詞も他動詞もある。そのテイル形は能動の場合でも受動の場合で動作の継続を表す。

例：光る 燃える 輝く

・主体変化動詞：主体の変化を捉え、テイル形は結果継続を表す。

例：染まる 腫れる 濁る

「赤ク」・「赤ニ」と三種類の動詞と共起する場合、以下のようになる。

「赤ク」・「赤ニ」が主体動作・客体変化動詞と共起する場合、変化する「客体」を色彩の面から説明している。

- (9) 太郎が壁を赤く／赤に染める。

また、「赤ク」・「赤ニ」が主体動作動詞と共起する場合、動作をする「主体」を色彩の面から説明している。

- (10) 灯りが赤く／赤に光る。

そして、「赤ク」・「赤ニ」が主体変化動詞と共起する場合、変化する「主体」を色彩の面から詳しく説明している。

- (11) 海は赤く／赤に染まる。

以上の分析に基づいて、本発表は「文成分」と「共起動詞の種類」を考慮に入れ、実例調査を通して「赤ク」と「赤ニ」のふるまいを見ていく。

### 3. データの収集について

データの入手は現代日本語書き言葉均衡コーパス(データバージョン 1.1)と検索アプリケーション中納言(ver.2.4)を利用する。「赤ク」もしくは「赤ニ」が修飾語となる場合は、「赤く壁を染める」のように、「AクNヲV」のように動詞と直接結びつかない場合がある。したがって、検索条件は「赤ク/赤ニ」の後十語以内に動詞が含まれるものに設定した。

この検索条件で、「赤クV」の用例を2460件、「赤ニV」の用例を912件入手した。手作業で「赤ク」・「赤ニ」が動詞とは係り受けの関係ではない場合(赤くも腫れてもない)と慣用表現の場合(朱に交われれば赤くなる)などを除外する。以上の作業を通して、「赤ク動詞」を1405例、「赤ニV」を94例入手した

## 4. 「赤クV」と「赤ニV」の分布 一文の成分と動詞の種類

### 4.1 全体的な傾向

まず、「赤クV」と「赤ニV」の分布の全体的な傾向は下の通りである。

表 1 データの内訳

		赤ク V	赤ニ V
補語	なる	590	26
	する	134	4
修飾語	主体動作・客体変化動詞	146	12
	主体動作動詞	101	7
	主体変化動詞	405	45
合計		1405	94

この分布では、通常、動詞の補語と修飾語の位置に現れるのは形容詞「赤ク」であり、「赤ニ」の使用は稀であるということがわかる。

次に「補語」となる場合と「修飾語」となる場合の分布を示す。

### 4.2 「補語」の場合

「補語」となる場合、「赤クV」と「赤ニV」は「なる」と「する」との共起が見られる。

表 2 「補語」となる場合

	赤ク V 合計：29 例	赤ニ V 合計：724 例
	なる 26 する 4	なる 590 する 134

### 4.3 「修飾語」の場合

#### 4.3.1 「主体動作・客体変化動詞」と共起する場合

表 3 「主体動作・客体変化動詞」と共起する場合

	赤ク V 合計：146 例	赤ニ V 合計：12 例
色彩の変化を引き起こす意味を含意する動詞	染める 85 彩る 3 塗装する 3 染色する 1 着色する 1	染める 3 彩る 3 着色する 1 色 付けする 1
色彩の変化を引き起こす意味を含意しない動詞	塗る 32 変える 3 腫らす 3 熱 する 3 熟す 2 焼く 2 付ける 1(以下同じ) 仕上げる 括る 塗 り替える	塗る 2 焼く 1
生産動詞	書く 2 描き込む 1 記す 1	描く 1

## 4.3.2 「主体動作動詞」と共起する場合

表 4 「主体動作動詞」と共起する場合

	赤ク V 合計：101 例	赤ニ V 合計：7 例
発光・光の受けを含意する動詞：	光る 26 燃える 21 輝く 20 照ら す 7 点滅する 5 発色する 3 日 焼けする 2 照り映える 2 点灯する 2 発光 する 1 晒す 1 てかる 1 紅潮す る 1 差す 1	光る 2 輝く 1 きらめく 1 照り 映える 1
発光・光の受けを含意しない動詞：	選択する 2 流れる 1 高潮する 1 揺れる 1 見る 1 見せる 1 滴る 1	縁取る 2

## 4.3.3 「主体変化動詞」と共起する場合

表 5 「主体変化動詞」と共起する場合

	赤ク V 合計：405 例	赤ニ V 合計：45 例
単純に変化を意味する動詞：	変化する 6 変わる 5	変わる 18 変化する 4
色彩の変化を含意する動詞：	染まる 144 色付く 30 濁る 9 変色する 2 紅葉する 1 黒ずむ 1	染まる 9 色付く 6 紅葉する 1
色彩の変化を含意しない動詞：	腫れる 50 爛れる 19 充血する 11 熟れる 7 焼ける 6 錆びる 5 残る 4 実る 4 写る 4 表示する 4 盛り上がる 4 熾る 4 潤む 4 膨らむ 4 咲く 3 滲む 3 浮き上 がる 3 濡れる 3 覆う 2 茹で上 がる 映える 浮かび上がる 腐 る 広がる 荒れる 熟する 焦	見える 5 熟れる 2

	げる 揺らめく 目立つ 育つ 気触れる ささくれる 灼熱する 1 萌える 弾ける 泣き腫らす 汚れる ぷつぶつする むくれ上 がる 禿げる 茹だる 浮き出る 粘つく 尖る 膨れる 負う 縮 れる ささくれ立つ 透き通る 上気する 突き出る ぷつぶつす る はためく 連なる かじかむ しぶく 膨れ上がる 湿潤する 帯びる 残す 淀む 仕上がる 彫る 流れ出る つやつやす 保つ 括弧る 変身する 析出す る	
--	--	--

次の節では、「赤ク V」と「赤ニ V」の棲み分けについて考える。

## 5. 「赤ク V」と「赤ニ V」の棲み分け

### 5.1 「補語」の場合

動詞「なる」と共起する場合、「赤ニ V」の用例が少なく 26 例である。そのうち、「交通信号」(18 例) 「化学実験」(3 例) 「果実の色」(2 例) 「傷跡の色」(1 例) 「赤字」(1 例)である。

(12) 信号が赤になった。(安倍晴明)

(13) 青いリトマス試験紙が酸性では赤に、赤いリトマス試験紙がアルカリ性では青になる。(幸福の革命)

「赤ニ」の使用環境を考えてみると、まず、「赤ニ」が使用される文脈は、色が離散的に存在し、色が互いに対立しあう概念を表す場面であるといえる。

信号灯の場合、色は「青」・「黄色」・「赤」のように離散的に存在しており、「前進可」・「注意」・「前進不可」といった対立しあう概念を表している。リトマス試験紙の場合は「赤」・「青」は「酸性」か「アルカリ性」という対立しあう概念を表すものとして離散的に存在していると言える。このように見ると、「赤くなる」に比べて、「赤になる」は色の対立によって表される意味概念の対立のある文脈に現れることが特徴的である。ゆえに、「赤になる」は色で表される対立した概念から、一つの色に焦点を当てることで概念を特定するという文脈で使用されるといってよいだろう。

そのほか、「赤字」の例が 1 文ある。この場面では、結果の色の変化で「欠損になる」ということを表し、メトニミー的な表現とも言えるだろう。

(14) 駅をつくることによって私ども収支がはじけるわけですが、その結果が赤になって出ればこれは収支が悪化したわけでありまして……(国会会議録)

一方、「する」と共起する場合、上の三例の文脈のいずれにおいても、色彩の選択肢の存在が読み取られ、「赤にする」を「赤」という選択肢を選ぶというように解釈することが可能である。

- (15) 例えば、文章を入力した後で、『○○』という文字は全て赤にする、とか『以上』は『以上』にして右詰にするとか……(Yahoo!知恵袋)
- (16) 全体的に血のイメージを持たせたかったので赤にしてみました。(Yahoo!ブログ)
- (17) 一(髪の毛の色の話)「黒く染めて、短くしないと退学だって」―「…いいのかよ。自慢の髪なのにステージで目立つようになって、赤にしたんじゃなかったのか。」(Bad boys!)

## 5.2 「修飾語」の場合

「補語」の場合と同じように、「修飾語」となる場合においても「赤ニ」は色の対立によって表される意味概念の対立のある文脈に現れやすい。

動詞「変わる」と共起する 11 例のうちの 10 例は信号の色であり、この場合の「赤」は単に色を表しているというよりは、メトニミ的に「赤信号」を表しているともいえるだろう。

- (18) 警戒信号が赤に変わった瞬間、だしぬけに扉が開いた。(オバケヤシキ)

そのほか、「赤ニ」が使用される文脈には「色の多様性に言及する場合」「色変化の始まりがある場合」「色が詳細な説明を受ける場合」が特徴的である。いずれの文脈において、「赤ニ」の使用は文法的な義務に近い。

### ・「色の多様性に言及する場合」22 例

- (19) 金や銀や青や赤にきらめく虹のつぶの中で、むすめは手をあわせました。  
(花にすむ馬)

「色の並列」が含まれる文脈に現れる「赤ニ」の使用は文法的な義務といえる。しかし、このような「赤ニ」の用法は、同時に現れる色のバリエーションを表現できない「赤ク」を機能的に補足しているように見られる。例えば、以下の例は「赤ク」が「青く」と並んで「変化させる」を修飾する例であるが、「赤く青く V」は同時に現れる色のバリエーションの表現として読み取られず、事象において順序的・反復的に現れる色を表している。

- (20) 梅本は顔色を赤く青く変化させながら山際を送り、エレベーターの前でしどろもどろに挨拶していた。(御堂筋殺人事件)

### ・「色変化の始まりがある場合」7 例

- (21) 頭部のランプが青から赤に変化した。(まぼろし曲馬団)
- (22) 初芝選手のリストバンドがこれまでの黒から赤に変わってたんですがどうかしたんでしょうか？(Yahoo!知恵袋)

カラ格項は色変化の始まりを表している。これに似たような「赤ク V」の例がある。カラ格項の後ろに必ずニ格項がそれに呼応するとも言えないようである。

- (23) 実は緑色から赤く変わる。(Yahoo!ブログ)

### ・「色が詳細な説明を受ける場合」9 例

- (24) 青い瞳がルビーのような赤に変化する。(キスは殺しの始まり)
- (25) 見とれるようなあざやかな赤に変わり、なんともいえない風味がある。(イングランド田園讃歌)

「色が詳細な説明を受ける場合」は「赤ニ」に連体修飾成分がかかり規定されている。「赤ク」よりはより具体的に事象に関わる色を説明している。このような修飾語に対して具体的な説明を成すために、名詞としての「赤ニ」の品詞的性質が利用されている。

しかし、修飾語において対を成すものはごく稀である。対を成さない語からなる修飾語は

どのように具体的な説明を受けているかは興味深い、それについての議論は別稿に譲る。

## 6. まとめ

本稿は連用修飾語に見られる「Aク」・「Nニ」というパラレルに注目して、「赤ク」・「赤ニ」を例として取り上げ、大規模コーパスデータを用いて棲み分けの分析を試みた。考察の結果を以下のようにまとめておく。

① 通常、動詞の補語と修飾語の位置に現れるのは形容詞「赤ク」であり、「赤ニ」の使用は稀である

② 「赤ニ」は色によって表される意味概念の対立のある文脈に現れやすい。

③ 以下の三つの場合において、「赤ニ」の使用は文法的な面において義務的といっているが、事象を表す機能の面から「赤ク」の補足を行っている。

「色の多様性に言及する場合」(例：赤と金に染める)

「色変化の始まりがある場合」(例：ランプが青から赤に変化する)

「色が詳細な説明を受ける場合」(例：あざやかな赤に変わる)

## 言語資料

現代日本語書き言葉均衡コーパス(データバージョン 1.1)

検索アプリケーション 中納言(ver.2.4)

## 参考文献

- 奥田靖雄(1977) 「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階」『国語国文』8 宮城教育大学 [松本泰丈編 (1978) 『日本語研究の方法』に所収、pp.203-220.]
- 井本亮(2013) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』にみられる副詞的修飾関係「赤ク V」について」『商学論集』82(1)福島大学経済学会 pp.1-19
- 工藤真由美(1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 新川忠(1979) 「「副詞と動詞とのくみあわせ」試論」『言語の研究』言語学研究会編 むぎ書房 pp.173-202
- 新川忠(1996) 「副詞の意味と機能—結果副詞をめぐって」『ことばの科学』7 言語学研究会[編] むぎ書房 pp.61-80
- 橋本四郎(1975) 「修飾 — 連体と連用」『日本語と日本語教育 文法編』文化庁 pp.141-192
- 早津恵美子(2010) 「連用修飾語の解体--再構築にむけて」『国文学：解釈と鑑賞』75 ぎょうせい pp.60-68
- 矢澤真人(1985) 「情態修飾成分と〈シテイル〉の意味」『日本語学』第二巻 明治書院 pp.63-80
- 矢澤真人(1992) 「格格の階層と修飾の階層」『文藝言語研究 言語篇』21 筑波大学文芸・言語学系 pp.53-70
- 矢澤真人(2000) 「副詞的修飾の諸相」『文の骨格』岩波書店 pp.189-233